要約

本研究は、青年期の孤独感におけるアサーションの問題を検討することを目的とした。孤独感は社会的関係の欠如により生起するとされ、社会的関係の構築・維持が孤独感を低減する。社会的関係の構築・維持を促進するのがソーシャル・スキルであり、本研究ではその中でも、他者に受け入れられる形での自己主張を意味するアサーションを取り上げた。

研究１における調査対象者は、大学生 120 名（M＝63、F＝57）であった。改訂 UCLA 孤独感尺度について因子分析を行い、４因子（「孤立」、「良好な関係」、「親密関係の欠如」、「親密関係の保持」）を抽出した。アサーティブ・チェックリストについての因子分析では、５因子（「自己主張」、「権利主張」、「過失引責」、「自己表現への抵抗のなさ」、「自己信頼」）を抽出した。孤独感尺度の各下位尺度得点をもとに被験者を２群に分け、それぞれの群について、アサーション各下位尺度得点の違いを検討した。結果、関係にポジティブな評価している者の方がよりアサーティブであることが分かった。

研究２における調査対象者は、大学生 136 名（M＝55、F＝81）であった。孤独感類型判別尺度 LSO について因子分析を行い、２因子（「LSO-U」、「LSO-E」）を抽出した。アサーティブ・チェックリストについての因子分析では、２因子（「自己主張・権利主張」、「自己表現・自己信頼」）を抽出した。落合（1974）の分類に従って類型化を行い、各群におけるアサーション各下位尺度得点の違いを検討した。結果、他者との理解・共感の可能性を信じる者の方がよりアサーティブであることが分かった。